

◆特集 平和を求める女性たち

小さな声を聴いて

ちば・戦争体験伝える会

市川まり子

戦争の悲惨な実態を知りたい

2003年にイラク戦争が始まって、2004年に自衛隊がイラクに派遣されて、「戦争が近づいてくる」「戦争がどんなものか知らない人たちが、また戦争を繰り返す」「戦争の悲惨な実態を知らせなければいけない」と、2005年に、「ちば・戦争体験を伝える会」(以下、伝える会)を作りました。

79年程前、戦争が惨憺^{えんたん}たる敗戦で終わった時、この国の大きな街はみな焼け野原と瓦礫の山で、多くの人々が傷つき、大切な人を亡くし、孤児となり、住むところを無くし、飢えに苦しみ、そこから日々の生活を始めたとのことです。

千葉市でも、1945年の5月・6月・7月と3度の空襲で中心市街地の7割が焼け野原となり、900名

もの人々が殺されましたが、あまり知られていません。2005年の7月に「あなたは七夕空襲を知っていますか?」という集まりを持ち、千葉市空襲や東京空襲の体験者の皆さんのお話を戦後生まれの私たちが伺い、その体験を千葉の子どもたちや若い人たちに伝えようと、会を立ち上げました。

伝える会の新聞報道を見て、親子で戦争体験を聴きたいという依頼が届きました。子どもたちに伝えるには絵があるといい、素人の絵でいいからと体験者の皆さんに描いていただき、絵を見せながら話していただき、やがて、間もなく、紙芝居づくりが始まりました。出来るだけ絵もご本人が描いて、描けないときは私たちが代わって描き、千葉市空襲から始めたのですが、皆さんの体験は、東京空襲、和歌山県への縁故疎開、予科練、中国戦線での兵士の体験、朝鮮からやってきた少女の体験と



筆者を語る平和

幅広く、沖縄の宮古島・伊江島・与那国島を訪ねて作った紙芝居もあります。これまで作った紙芝居は YouTube にアップして、「ちば・戦争体験を伝える会」のホームページからご覧いただけます。たくさんの人々の死を目にし、耳にし、生き残って戦後を生きてきた一人ひとりの「小さな声」を伝える紙芝居です。

学校や公民館、コミュニティセンターへと体験者の皆さんと一緒に出掛けて、紙芝居と体験談の出前講座をやってきました。戦争体験を語れる方は少なくなつて、でも皆さんお元気で、子どもや若者たちが熱心に話に耳を傾け紙芝居に見入ってくださいると、ますます元気になつて声に力がこもります。

今の世界情勢やこの国の状況への危機感が、更に力を込めさせているようです。

戦争を繰り返させないために

千葉市の「きぼーる」という施設で、毎年6月、さまざまな市民団体の方と一緒に「千葉市平和のための戦争展ピースフェア」を開いてきました。今年のテーマは「戦争と人権 戦争が奪ってきたもの・戦争につながるもの」として、過去の戦争の歴史をたどり、「戦争の芽」をしっかりと見つめたいと思います。

日々街が破壊され、人々が殺されている映像が次々と流れてくる現状に対して、私たちは全く無力ですが、戦争の悲惨な実態や国民の犠牲を承知の上で戦争へ突き進むとするかのようなこの国の政治に対して、一人ひとりのいのちの側から、きちんと声を上げていこうと思います。街宣用の紙芝居は、『オスプレイが』とんでくる』『武器見本市が』やってくる』『今年で私は77歳くまだまだ役に立つ』『憲法さん2』』があり、「地球中の子どもが死んだらあかんと、僕は思うんや」という宇治共同作業所のびのび班の皆さんが作った『へいわのうた』も紙芝居にして歌わせていただいています。そして、道行く人に声掛けします。「政治を人任せにしたらアブナイ。選挙に行こう！」と。

(いちかわ まりこ)